三河之物語

三河之物語

一　大久保次右衛門物語に、物前ニて乗へき馬は古来より四寸三寸にむちかゝりといふ、第一大なる馬は武具して乗下り不自由也、むちかゝりハけたてあふりたて尻をもミて先へ行たるは見事也、かんよき馬をひかへ〳〵のれは一段と見くるしく見ゆる也と語候き

一　同人物語に、大高の兵糧入の時山にそふて備へをるを見て内藤甚五左・四郎左其外皆々定て軍有むといふ時、杉浦八郎左軍もたぬ敵也、心安く通り候へと被申候、何とて軍もたぬ敵也と見たてと後に各尋ね候へは、軍せんと思はゝ旗の際に物は下立て居へし山の敵も下へおり候ハぬに結句人数そろ〳〵山へ上る程ニ

軍もたぬ敵也と申されき、案のことく軍なかりき

同人物語ニ、石川新九数度の手柄カ常常也、平生(へいせい)は一段となれもの也、矢矧の退口の時鵜殿十郎三郎新九と一度にのき候、敵強く逐かけ候時十郎三郎且又(是)かくれなき切者なれは新九がんじやうにて先立にのき候時言葉をかけは返スへし、新九せりあひうたるゝ間ににけのひんと思ひてことはをかけ返セと被申ける時新九立帰、持たる鑓を横たへておれも返すワれも返セといはれけれは、やれたハけ、にけよとて二人なから又にけ候、平生の利根(りこん)と違ひ候とて誉被申候よし

一いらふのき口の時、敵つよく追かけ候を次右衛門さい〳〵返し合せ〳〵防きてのき候、其時はそりかさとて編笠のはの

そりたるをきて退けり、敵よハヽり懸てはそり笠さりとては見事也、名のり候へ〳〵と云かけけるを名そなきとて名のらす、大井川を渡り向ひにて持たる鉄炮を黒野五郎太夫に、これうて我より上手也、必す打あてよとて渡し、我を台にしてうてとて川端にうつふしに寝て打セ候、敵川半分へ五騎乗込一の先の敵を川中へ打倒す、それより敵つかすしてきはなれして内藤四郎左・筧助太なと、次右先は何とて名のらぬそ、名乗たらは敵までの手柄にて有へきと被申候時、か様の時は名のらぬもの也、敵名聞てよはゝりかけてさりとてハ見事也、さゝへよといはれたる時みかた続かす、しんかりの者一人うたれは猶まけになる者也と各同年・年兄の

衆に被申候を各聞て尤と被申候由、其時家康様より黒野五郎太夫に御鉄炮御持被成候を被下候、後迄持申候つる

一見附のき（退）口の時、大久保勘七坂の上石にけあかり、先へ来ル敵を三間計にて鉄炮にて打はつし候を、家康様御覧候て、勘七郎か逃て息もおさまらぬに常のことくためてうちたる程にはつれ候、息のおさまらぬ時は台尻を両手一束に取てはなつもの也と御おしへ被成候由

一みかたヶ原負軍の夜、此まゝ置ならは敵夜討又は明日も勝にのらんとて、大久保七郎右衛門思案して惣御家中の鉄炮を集め候へは、負軍のあけく漸々鉄炮廿四挺有つるをめしつれ、さいがかけへまハり信玄の本陣の方へ三ツゝうたせ候、敵殊の外騒き明る早天に味方ヶ原を

引取候て家康の家中能者多しと見へ候、聊爾にはしおされましきと信玄被仰候と、此事三河へ聞へて一類中、七郎右衛門手柄なる才覚と申候へは則常源七郎右衛門出来したり、一類の中に火はかけぬか風上に火を懸て被申候を各聞て、尤切者即座の分別と誉候由

一同時、退口に渡部半助といふ者討死したり、小坂新助引すりのくとて手を取て引は首さかりて引かねけるを、七郎右衛門馬の上にて是を見て、手を取て引はひかれぬもの也足を取てひけと申され候間、足を取て早く引かけて敵に首をとられすと新助語申候

一同時、相模馬にてのき候を名は忘れ候誰やらん、新十郎殿草臥討死仕候、後馬にのせて給れといふ程にのせ候ひつれば

むすとしがミ付二人馬ニて退候、事(殊)外馬草臥候つる、あふなき事にあい候を古キ衆是を見てか様の時は何と申共必二人馬にのせぬ也と次右衛門をしへ候由

一 前立物大キなるは悪しく候、堀川にて馬上にて相模のりつけ歩者うち候とて振上候刀、前立物につかへてその者にけ(逃げ)過て打はつす由、同し時語被申候

一 門のワき升形といふ事は人数を計り出す故也、さる程ニ、何間ニ何程人数居といふ事を覚て升形はするもの也と同時ニ語被申候

一 城には虎口の多きかよきと山本勘介語候由、同時相模被申候、虎口多けれは寄手城中より切て出んとの為を思ひて虎口には人をかさミて置也、まく時も猶同前敵の

人数つからかすため也

一 同人申候とて語被申候、虎口並町口なとハ、直なれハ押込て敵奥まて見こむ故に人数の方便もり返す事成かたく、曲れは押込候敵もまかりめ心許なく思ひ又ハ横矢こはく（怖）思ひて候ほと押込ぬもの也、何時も曲りめにてもり返す、又まかりめ余りに多けれは返す時ミかたに鑓をふミ落さるゝものなり

一 猪（槍）の越中物語に、まつ何者にてもあたり次第早ゝ高名したるかよく候、又よきもの討候時取替候も安ゝ候、よきもの初から討候と思ひ候へは自然討はつるゝ事有由、語被申候

一 同人語申候、人並にかゝるとおもへは殊の外跡になる者に候、人に勝れたると思へは漸々人並に成ものにて候まゝ陣屋

出るから、ぬけつくゝりつさきへ人を越候、さきにて物前にてさきへゆかむと思へは中〳〵罷成す候由、物語申候

一鰹節を上皮けづりすて中を帯にはさめは物前ニても又ひたるき時もかミ候へは殊外力になる由、水飲は竹にて腰にもつへし

一渥美源五物語に、夏飯をつゝミてもつには薄（スゝキ）の葉よし、めし（飯）すへす（饐えず）してよし、つとにすへし

一鎧にて馬に手鑓もち乗る時は、まつ鎗をつきたてゝ馬に乗り後に鑓を取る也、鑓なから乗んとすれハ馬かけ廻りて乗れぬものゝ由、中山勘解由物語也

一備つくり物前にてはもふ〳〵として何の訳もなきもの也、そこにて油断すれは悪しくなる也、其時思出し

魂を入るやうに心をおもへと米津藤蔵物語の由、次右エ門語被申候、其時何にても喰候もよく候、常の心懸を思出せは夜の明たるやうになるもの也

一陣取てはあたりを見、先の馬の足場なとを油断なく見るものゝ由、同人語被申候

一所々の案内者をもとめ引つけたるは第一也

一阿部四郎兵衛に各あたりこぶし教へ給へと申候へは何のわけはなきそ、一はい引ふくらめゆひわら（結ひ藁）射ると常の心のやうに思ひて三間計へ引つけて射れハはつれぬもの也とをしへ申候

一真田にて両方足軽出打合候に、度々みかたおしたてられ候権右被参うたせ候時、しはしもり返し又おしたて候に

其時七郎右衛門、四郎兵衛に下知して打せ給へと申候、四郎兵衛被参指物をぬき田の畴（うね）につきたてゝどうと跪き居候へは、みかた各そのことく致けるを敵見付て其のちはよらす候由、物語被申候也

一

五郎右衛門殿・次右衛門・四郎兵・足立右馬なと小田原にて寄合咄被申候時、米津浄真（藤蔵事也）は矢田作十郎・波切主税・大原左近右衛門・八右衛門なとにはまつことをとらぬ度数にて有へしとて右の衆語被申候、ワかき者共心懸之通尋候へは惣別覚は跡を手柄と思へは早よき比也、死たるよりいきたるか増しと思ひ、身構へをして見合分別出来るものなり、幼キ子と立並ひ候とも幾度も先懸して人に見セむと常におもふと語申され候よし

一浄真、三郎様の御前ニて色々武者物語致され候時名は忘れ候、浄真手柄なる場は何程か有つると御尋の時、別に覚は無御座候、鑓ト存候場十二度御座候、其内八度はぬし一人の鑓又ハさし引にて大勢の人助け候よしとこ〳〵にてと場を引語被申候とき、杉浦八郎五(左)その座にて高橋縄手ニて馬上にて敵三騎と寄合つき落し給ハ今のもの語にこれなし、それも十二度の内かと尋候へはいや〳〵左様の少の事は幾度も有へし程に申上候ハぬと被申候由

一城際の軍はセぬもの也と昔からいひ伝たり、誠にて候安城にて城際の軍してつけ入にとりぬと語被申候也

一陣を取候ては其家中のよき切者成もの三人も

所により五人はかりもきゝかま□(り)に出し候也

一きゝかまりに出候ては石にても何にても枕をしていねて候へは一町計り遠く寄来ル敵枕に響き足音必ひゝく由、源五被申候也

一忍ひの時は具足にても着物にても白キと黒キ夜も遠くより見へ候也、空色とて朝見(アサギガ)へす候

一姉川の時左衛門尉一番、榊原式部二番備也しか、姉川の向ひの岸高く馬の乗上場あしく候故に左衛門尉殿少まハりてかゝり候時、二番手の式部殿道をかへす直にかゝり、先手二ノ手両方よりかゝり候故朝倉勢早く崩候よし、各物語也

一同時、信長より御使に福富平左被参、家康はいつくにと

尋給へは、鳥井四郎三出向ひ、何の御用にて候と被申候得は軍仕様御錠（諚）之通可申渡候由被申候時、四郎左先手仕候家康勢御旗本より下知をうけては不罷成候仕そこなひ候とても一身の負、惣負には致ましく候、其仰候に及はす候とあら〳〵と有けれは、平左其方名は何といふそと尋被申候時、鳥井四郎左衛門と申候、家康内にては人之数にも入候はぬ少身者に候由被申候、そのまゝ平左帰候て信長に右之通被申上候へは殊の外御感し候て聞及ひしより家康は人持にて候と被仰候由

一

佐久間右衛門尉三州へ加勢被参候時、みかたヶ原の前の時軍の様各相談之時鳥井四郎左被申候ハ、城下間近ク通る敵をそのまゝ通し候事有ましく候、たとひ

負に究候共、能者と討死して後迄名をのこし候へはよく候、城際の軍は付入を大事とする事覚悟の前也、其用心さへ候ハヽ一合戦と被申候を右衛門尉聞て、家康の鳥井は見事の武士大口者と被申候由、案のことくみかたヶ原にても先手一手にて勝て候其後鳥井四郎左討死候て大崩之由

一

戦陣の時、陣払の煙を敵あけ候を各見て、扨は敵退候、つき候はんかなと各申候へは、杉浦八郎五郎見候て陣屋煙にあらすそのまねをしておひき出スと存ス、其故は敵も五六十日余居候小屋ニてある程に、陣払の煙ならは黒く煙のたち見ゆへきニ煙白きほとに刈置たる木草に火を懸たると存候由被申候間、則物見を出し候得は

案のことく陣払にてはなく候由、語被申候也

一成瀬吉右・日下部兵右物語に籠城候時大将心持肝要也、何方も見へ候高キ所に常に居て武者の動きをうしろより見ると諸人に思わせたるかよき也、高所なくハ家の上になり共居るへし、大将見へねは諸人無心許おもふなり、古キ衆被申候由、語被申候

一同所に大将も又は物頭なとも耳談合さゝやき事せぬもの也、諸軍勢弱ミ付者也と昔人被申候由

一城に多門作り散々あしく候、籠城之時は甲のまひさし有も打おゝひて欝陶敷ものゝ由、本多中書物語に候

一志賀の城の時、多門作りの内ニて鉄砲三ツ四ツうちつれ煙にて暗くなり何共ゐられ候ハぬよし小堀新助物語候

一うちがいには干飯（ほしいい）よく候、木綿うちがい中に口有をこしらへ置候て用候時、干飯入腰ニ付候へはさい〳〵囓（かみ）候によく候又はうちかいなから水に入て少おけはほとび（潤）て飯の様になるもの也と、吉右語り被申候

一梅干の肉をすりて絹につゝミて糸をつけて持へし沙（砂）糖もよく候よし、同人語り候

一いらう退口の時おし前時は大次右衛門御旗奉行、内藤四郎左御鑓奉行にて候つる、敵つよく付候て三通に御退候時、左衛門尉人数連一筋、七郎右衛門御旗につきて人数連て一筋・殿様一筋御退候時旗奉行を内藤四郎左ニ御申付御鑓奉行を大次右衛門に御申付、定て御心持候つるやとおの〳〵とり〳〵に申候也

一　小田原の城御縄張の時、唯城は逃入やすきやうに付入りならぬやうに城は臆病に取ものゝよし

一　横矢を専らにまかりをあらせて御縄張被成候

一　小田原陣の時さ川の方井伊兵部殿人数被遣候、森を後にあてゝ人数立よと被仰る、兵部殿河原に備被申候へハ殊外御腹立候て、惣別城際にて備候には森かしけりを後にして備へ敵に人数の程らひ見セぬやうに社（こそ）するものなれ、敵森より備のうち人之足数迄見すかす所に備へ候事合点不参候由御腹立候へは、兵部殿御錠（諚）ニて候間右之処に備へ候由被申候時御馬の上にて御小刀をぬき御腰物にてかねを御打、此かねの罰を蒙り候法も候へ、あそことは不被仰候由御意候て、御小刀を押折御捨候その御小刀

の柄をふかう清十郎拾ひ候とて悪しく申候

一　其時、惣別城際の備は森かしけりを後ニ当て候か山か高き所に取ものゝ由、被仰候由

一　其時物見に御座候て、さ川（酒匂）の川に着て御下り海はた浪うち際にて腰（ママ）より、城の内御さけすミ御帰候、跡より被参候御共之衆城際を乗通り候を又御しかり被成候、惣別城際を通るもの歟、もし城よりつきて出候ハヽ、其侭うち（討）死致へし、逃たるも見苦く有へく候、討取らるれは城の競になるを知り候ハてほれもの（耄者）ともにて候と御しかり候、城を見るには際より乗廻して横よりこそ見る作法なれと御意被成候つる由

一　其時諏訪の原御本陣也、物見に御出候間、各は是に居て

陣取可仕とて内藤四郎左・高主水・渡忠右・筧助太・服部半蔵おの〳〵五・六騎ワかき衆被召連候、御帰候て御陣屋を御覧被成候、各御呼散々御しかり候て不勘者なる陣の取様哉、皆々は合点可参と思召候つるに初心にて候とて御しかり、各陣取直し候、始と表裏に成り、始は城の方へ向ひ陣を取候、御意にはか様にはやまかれ（早や巻れ）候城、中々切て出ぬもの也、其心あらは山より何方へ寄る時いたすへし、はやか様に取まかれて城中の方便は夜討計也陣取定らぬうちに夜討うつもの也、城より出候てはかたす候、何方は案内者なれは何方になり共かくれ居て陣の後より懸敗りて、城へは入様に夜討うつ者ニて候まゝ、その心得をして裏を本（表カ）に城際の陣は懸るもの

なりと、御意候て御しかり候由

一　城中より橋をやき候事あらは、やかせたるか能候と被仰候よしこれも夜討のため也、城へ乗時ははしも堀も同事也

一　城取巻候時、巻の前に橋あらは心を付へしと各物語のよし、もし夜討城よりうつ事あるへし

一　権現様城御セめ被成候には何方にても一方は御明候て御取巻御攻被成候なり

一　関原御合戦の時、三州藤川より村越茂助御使に上方大名衆へ被遣候、上方大名細川越中・加藤肥後（美按あやまり）・山内対馬・田中兵部・浅野紀伊守・堀尾信濃・黒田筑前・加藤左馬其外大勢清洲迄被参、御馬遅しとて毎日待かね被罷在候、其時大形福島大夫殿・羽柴三左衛門殿両人は

上方の衆二頭ニて居被申候、本多中書・井伊兵部両人且(ママ)又一日代に先をし被登候折節、各清洲の城ニて振廻の所江村越茂助被参、中書・兵部被申候ハ、何とて被参候由申候へは、茂助申候ハ上方大名衆へ藤川迄御座候先の様子知候ハす候間、是に御逗留被成候由、御使に参候と申候へは右両人まつ相待候へ、上方大名衆御馬何とて遅キと無心許被存あやふミ被申候処へ、左様の御使被申候ハヽ猶以各不審ニ可被存候、まつ飯を給られよとて台所にて飯を御振廻候、茂助飯を喰止ふと心に出し候分別に御使に参り、よかれあしかれ御意之通不申候へは、誤りに成こと存、中書・兵部殿座敷へ出、酒のあいさつめされ候内に、ふと座敷へ茂助出被申候得は、各大名衆茂助

殿何とて御越候由尋被申候、中書も兵部殿も卒忽に出被申候とあきれて御入候、茂助ハかまひなく各へ御使に参候とて右之通有様に被申候得は、諸大名衆尤に候、先手御馬を相待チ取懸候ハぬ故に敵ミかた定メ難きと思召候はむ、さらは早々先へ働き候はんとて其坐にて手分して川越の合戦候、茂助罷帰り右之通被申上候得は左様に遠慮なしに申さむため汝を遣ハしたり、はや敵ミかた定たり、合戦は被成よきと御意候つる由語被申候、中書も兵部も茂助卒忽にして致にて候と後に被申候由

一

其時かち山へ御取よセ候時、駿河衆一合戦致し御目に懸んとて、軍始散々にうたれ候、大阪の城より出候てくひ

つき引かねる時、権現様御覧被成、中書・兵部あれあけ候へと御意候と、両人其まゝ馬に乗かけ出し足軽かけ打立させそのまゝ引あけ被申候由

一 大阪御陣の時二条にて、藤堂和泉守被参候へは権現様和泉先手を被仰付候、心得は何と存候と御意被成候藤堂そのまゝ御返事に別の心得も無御座候、何卒して敵をおひき出し引セぬ様にあいしらい附入に仕候より別の方便無御坐候由被申候へは、一段御意に入てそれよ〳〵其合点にてこそ先(まず)はしたきものよと上意候て御機嫌に候つるよし泉州物語ニ候

一 信符(ママ)のき口の時、敵つき候て合戦あるへきかなんと被申候時、敵飯けふりを小屋〳〵に上ヶ候時其まゝ引払ニ

退申候故敵遅クつき候也、其時功者衆めしたく煙を見て飯を喰あけてならてはつくましきと思ひて引のき候へは如案に候つるよし

一

大阪御陣の時、城焼立前には御合戦過、井伊掃部殿権現様の御前へ被参候へは、甲を脱ワきに置て御前へ被参候へは御床几より御立候て、御手を出され大将礼に御あしらい、今日は骨折の由被仰其後、御床几に御腰懸られ是へ寄候へと御意ニて近くに召、今夜の陳は何と御意候時ニ、掃部はや城焼立申候うへ何事も御座有ましく候と被申候へハ御手まねき被成、いやそれかワ（若）かきそ、勝軍の時は今夜はあるとおもへと御意被成候、案のことく帯くる輪に秀頼居被申

候よし明日しれ候よし

一　諸事物具に軽きを本とせよと次右衛門語候

一　おしつめて備候時は少も高所能もの也と被申候

一　千の人数ならハ二手にも三手にも作りたるかよき者也、その間場により二町・三町、大人数ならは五町も六町も間を置て備たるか能よし也、先手合戦之間二ノ目はたらかてまほり居たる也、朝倉能登守被申候由

一　藤田弥七語被申候、景勝の常に定置れ候一番杉原常陸、二ノ目直江山城、三ノ手旗本、又一手跡備、以上四手又は五手につくり其間場により五町・七町物し馬より下り、馬は皆々備のうしろワきによる、皆々おりたちて跪く、大将と軍奉行計馬に乗まハる、先之合戦始

る時二の目立合、先負てミかた二の備へ逃かゝらは、誰にても切へしとかねて定おけは、みかた討あらす候、先負候者ワきよりあとへ逃備作り候て、本のにけにあらすと定おかれ候由、物語被申候也

一 川こし又は敵をおひき出し候半（そうはん）と思ふ時の足軽ハ大方かろ〳〵とすはだに出立せるかよきと被申候也

一 敵の備しとろに成時かゝらんためなる程に何卒おびき出す様に足軽かけよと謙信よりの定也と語被申候也

一 御用心之時権現様山中なと御通候時、御乗物の肩をかへ候時御供の歩行衆つくはい候へは、御しかり被成、立て居よと御意被成候

一 籠城之時前かとに、つるへ縄又はわらふちなどつくり

置せよと吉右物語被申候也

一敵陣へ入、屋陣取たらは屋敷中を棒にてつきまハれは、必埋めたる物あるへしと成瀬吉右物語也

一みかたか原（三方原）御退口の時、誰彼御馬の側につきたると諍（あらそ）ひ申候時、権現様その者共の刀を取寄御覧候て、誰ハ右に付誰は左につくと其証拠にハ刀にしるしあり、かやうに諍ひあるへしと思召、道々ひたもの御つはき（唾き）はき被成候、そのことく刀に御つハ（唾）の跡ありとて御見せ被成候由、丸山もの語申候也

一なべなくて食する様、米を手拭につゝミ水にてよく〳〵ぬらしてほり埋ミ其上に火をたけは飯になる也

一城中へ乗込時、先へ入たる証拠ニ火をかけたるか能候

先町にても焼は高名になる也

一　服部半蔵に打物両人を被仰付候時、可討人を跡先にあゆませ、中にたちて行ながら振帰りあとのものをまつ討、そのゝち先のものを切たる由、語被申候也

一　見付ニて俄に敵出きつくつき候時、大次右衛門・都木藤市一度に馬より下り、次右衛門は弓懸を取て鑓をとり藤市は弓のす引を緩々として矢を（本ノマ、）後に両人互に感し候よし

一　馬上にて俄に刀をぬけは手縄をきるもの也、心得有へし

一　めて（右手）のものきらすつかす弓手になる様に乗廻すへし

一　或人羽織の紋に御陣（本ノマ、）のうしろに白鴎を繍にし頭を馬手の方にぬい候を、権現様御覧候て逃鴎也、武具は

弓手かゝりに万（よろづ）の紋は付るもの也

一馬上にて刀を抜持てかく（駆）をはすれは、馬けとふ（蹴飛ぶ）時必馬の首をきる物なり、心得へし

一夜山にかゝりて退敵つかは、切火縄とて一寸計に火縄きりて火をつけてまかり（曲）め又は小高き所の木の枝か何そにはさミ置ば敵こたへたると見て必近付かぬるもの也、先々心安くのく也

一敵地へ打入候て陣とりの時は、大道筋又は爰かしこぬけ道を能見てさゝなとつけ又はほり切るもの也

夜討の用也

一馬上武者と勝負する時は馬を切か射るなり、馬はね落馬する時を討へしと語被申候也

一味方崩の時は道筋ニをらせぬもの也、際え引上高キ所

にをれは人見るもの也

一 大豆を干飯の様にしてうちかいへ入て持へし、人も馬にも喰セて能候由、吉右被申候也

一 御陣触ある時、前かとに肩に灸したるか能候、長陣にも肩ひけすして能候由、次右衛門被申候也

一 城中にさし物又は人の多く集る所ハ、必城の弱(搦カ)口と知へし鴟(とび)鳥なとをる所は人なき所と知へしと也

一 大将の用心する所は、居城より出て一日一夜又三よめ也敵地へ入ても前かと敵地さかい也、ねろふもの人数出しよき故也、惣別城廻又はくけ道多所用心場也

一 軍持たる敵は、旗をたて足軽を出し物し下立て旗の際に居、馬をは脇に一所に置也、厚く備へ静りかへりて

居るは大事と心得へし備なり、旗の手動き人数むら〳〵にそゝろ騒しきはやすきと心得へし

一藤田助兵衛物語に、杉原常に申候、足軽遣ひ様ニよりて五十か百に向ひ候、たとへは足軽五十あらは廿五ツ丶二ツに分て廿五人打上ケ候時夫を能見て引付てあた矢なき様に下知してうたセ、又始うち候者、念を入静に能薬込して打(うた)すれは大略敵崩候也、常に足軽共に打習セ候よし

一服部半蔵は常に用心致し候、いつもねるとては寝御坐は敷、そこにて寝候ハて隅の余の所へ立いね候よし

一座敷にはいり候に左の広キ所をはきると心得、右のひろき入口はつくと心得候由語き、きれは刀の柄にてうけむ用心、つかは取むと思ふと物語被申候

一　常に羽織を着て紐むすハす、是又用心抱かれ候時のはつれになると語りき

一　人をうつにも打るゝにも足にて蹴候か一能と被申候也

一　権現様二條の御城御取立の時、加藤肥後・浅野紀伊守なと申上候は、余り堀浅く狭く候て物あきニ候我々共に被仰付御普請可仕候由、被申上候へは御満足に思召候、何れ可被仰付候由、上意ニて其後肥後守なとハ太閤の取立、其道の合点も可参候者ニて候か心得不功に候、ケ様の所はわさと浅く取立て置候へは、たとひ敵にとられても復（また）のり返しよきやうにわさと被成候由、御意のよし

一　同所に御座候間御城内にて相撲・謡・鼓なとおの〳〵長屋

にて仕候か結句御機嫌能候故つねに集り候、是も人を多く御置候ハん御工夫にて可有之由

一　御番の時、其身差合・煩なとにて用の事候へは従父兄弟迄は苦しからす候、代に御番いたし候への由は御定、少々は他人も罷在候、御番頭衆代番多候由被申上候得は、其代に出候者も御内の者也、何れも御用に立候事ハ同し事にて候間、人数のつはめを本にして代にかまふなと被仰候由

一　同時、権現様御意に、はつ度は火之様に立たるか能者なり、水の様にたて候故人をそこなふ也、火はきつくあらけなく燃たつ故に人かねて用心して焼死なす水は上静ニ底深き故に人かねて油断して至る当座ニ死ぬ、そのことく始きつくつよくいひつけて後

を柔にすれは惜きものを損せす、はしめぬるく底ねバ
りなれハし出し候へは惜きものもかはハれすと御意の由

一

御先手へ御使に参候てうかと致候へは、先手家中者な
ふりたかり候、鉄炮なとしよりきつと旗本に知らセんとて
こなたより打懸る故又城中より打也、竹たはのワキ
なとへ同道したりなとする由に候、其時は案内者をつ
れて行たるか能と申候、申候ことく鉄炮うたせ候得は
あなたよりも打厳しく候、其時爰ハきひしくいつれもか様
（彼方）
に候、御指物は御とり御這候への由教候へは其人さ候と心
得て指物かくしはひ候故後を笑申候、安藤治右其所へ
其後参候へハ、いつものことく申て御はひ候へと申候を治右あら
けなく叱りはひて、いつも御身たちはかゝむりさきへはへ

見むと被申候へは、結句なふりたてにてワらはれ候由

一物見に御使に参候時、道筋又脇へ廻りていかにも懇に見、又は堀・馬のあしよせも見るへき由語被申候也

一関原ニて米津清右・小栗又市両人御使にて被遣候時かへりさまに清右高名被致候、又市見て御身は高名したるか両人御使に来て一人高名して一人せぬはあしき也、少々待玉へ、我も高名せんとて乗返し被申候仕合能頓(やが)て人を討、首もちて一度に帰御前へ差上候由

一米津清右畑分の政所の時、被仰付、清右所ニてとりもの御入レ権現様はや取たるか見て参候へと落合小平太御使に被遣候、いまた取候ハぬ程に帰候て其段可申上と存帰候時、御城の道にて親左平次に逢候、左平次何方へ参候由

尋申候へは、小平次(ママ)右之通語申候、左平次をしへて其身せかれにて候とも左様の御使に参たらはとり仕廻迄居て手伝してとりて返事を申上候もの也と申候へは、尤と思ひ則帰り清右所にて右のものとり候時、助とりして其後帰り御返事申上候へは、権現様親の子にて候とて御ほめ被成候

一物前にては何様の者にも言葉合たるか能物也、常におかしきあちやらなる事と思ふ事、後に覚になる、第一口をきけはふりよきとて誉候よし也

一物具して腰当には刀さしたらは必々陣屋ニて脱て試ミて出へき也と語被申候

一七郎右衛門、稲垣平右へ人をこし御出候へと申遣候、夜の事にて候

平右御こし候へは物もいわすに涙を流し、何事にてかあると無心許候つれは、後新十郎高名致し手柄致し候由各より申来候附候て参候、宮地源蔵呼出し其段語らセなとして七郎右衛門申様に新十郎は大かた能生れ付たり、形気も分別も我等に増たり、去程ニもし此道いかゝ候半と夜ニ昼無心許候つるに、最早家を続け候とて悦ひ語被申候由、平右衛門殿のちに物語被申候、堀川にて十六の年の高名也と語被申候

一

山本道牛物語に諏訪の原ニて城へおしこミて候時、門をたて申候まゝ馬上にて下知に、門の扉にあて腰ためにして扉うてと申候へは各鉄炮にて扉を打候へはおさへ候者共のきて心安く門へはいり候由、語被申候也

一

権現様被仰候とて阿備中殿物語に候、人ことに譜第たのミして奉公はせて居る也、外より来るものは能々奉公して用をたす故につかひ候へは弥譜第今々の者にまけ候とて不足して不奉公してあけくにはしる也、其後余所へゆきて我家にてあまへ候様にならぬ故に、又立帰て其時奉公すれともはや遅くて君臣和合セぬもの也、譜第のものは心安くくり入奉公セは何とて外より来るものにかへんや、よく〳〵心得て奉公セよとおの〳〵被仰候由

一

御主への奉公も一むすひと思へと被申候、祖父は祖父殿様へ其時の身のために御奉公、親は親殿様へ子は子殿様へ一むすひし也、親・祖父の御奉公を鼻にかけ

我代にセぬ御奉公、または我セぬ武篇につがんと思ふ心持なとおしへ被申候

一御奉公人は三ツの戒あり、御主の仰られ候事他へ洩シ御事譬(たとえ)は親を御成敗可被成候と被仰候事を聞たり共我に告候はゝ草の蔭迄恨也、又一ツハ傍輩の頼事中かく事、侍の心中ニてハなきそ、又一ツは何様に召仕さる共身の果報なきと思ひて御恨に存候なと教被申候

或時駿河へ御供に参候時、江戸を出候から宿にいね候ハヽ御用には立ましきそ、御殿に居候ても紙障子ひとへにて御用にたゝぬ事いにしへより有之ほとに御側はなれぬやうに一入(ひとしお)旅にてはおもへと被申候き

一謙信常に申され候、吾は義経に武篇を習也、人ことに

舞平家を昔物語と聞候故に身の用にたゝす候、吾ハ義経の武篇作所を身にあてゝ聞候身にくらふる也ト御申候由或人語候へは、其坐にて誠に我道ゑもの〳〵に引かけてよろつ聞くもの也、分別にすく者は其所を聞く、歌にすくものは詞つゝきをきく、かやうの物も後の異見誠に作り置候を人ことにうかと聞と語き

一

台徳院様の御代の時高坂甚内とて盗人の張本ありし、勝れたる故にたすけ御おき世上の盗人を御改させ候つる、甚内語申候、忍ノ時竹藪なとへは入らぬもの也、ね鳥さわけハ亭主用心するもの也

一

盗人を追ふて行に諸(跡)にたちて追へは先の者立帰刀にて払へは必す首にあたる也、逃るものゝ左の方に

そふて追ふもの也と語りき

一　ある所に盗人つきて候を甚内に見せ候へは、折節雪降候つる足跡を見て、是は物を取たる盗にて候由申候を何とて左様に申そと尋候へは、足跡深き浅き跡雪の上に見へ候へは土蔵（本ノマ）、の上をきりはいり伝ふそれを見て又とかく引入て御入候由申候、土蔵は上より切り候習なれ共か様に其下の物をとるやうにハ知られではならぬ事也と申候き

一　同人申候、盗人用心は薬師之前地蔵の後と申候、薬師は八日地蔵講は廿四日也、廿五日より七日迄は月も暗く闇に候故也、惣別夜詰久しき四（よつ）過迄居る所ハ取にくゝ、宵より忍び酉前仕廻候はねハ先々にて顕るゝもの也

と語りき

一　鈴縄とて鷹の鈴を十計り細き縄に付て旅なとにてははいり口に引はり候得は入にくき由申候

一　盗人を人ことにこはき者と思ふ、臆病者のしわさニて候女に追れ候ても逃んと計思ふものにて候、あやしも二度三度迄こはくあふなく思ひ候、忍ひつけ候へは取らむと思ふ心ハかりニて候、をそろしき事忘れ申候、其証拠には盗人に追ハれて立帰り勝負仕候もの有ましき由語申候

一　刀脇指寝所に置様、柄をあとへして倒（さかさま）に置也、起上りそのまゝぬきよし、もし人鞘をおさへ候へ共、柄あとにある故にぬきやすき由申候き

一　将軍様御目付衆へ御教候、惣してものいひ事ハ早ク異見

すれはなきもの也、異見するもの敵になりて見て両方くらへてよきかんに異見すれはすむかたおちて異見する故に相手きゝかぬるもの也と御教候由

一　人の善悪を見るに我身の好方へよきものをよきと見るもの也、人は得みちあるものなれハそれ〳〵のよき所を見たてよと御教候也

一　人ことに主は知恵あり、十人つかへは十人の知恵、百人つかへは百人の知恵ありといふ、主はワき目也、人にさせてあしき所いふ故によき也、碁・将棋我より上手なれ共脇めにて見れは悪き所見出す、何事も人にさせて見て直スはやすく知恵あるやうなりと語り申候

一　池田内左衛門甲州へとらわれて縄をかけ各番致候、皆

ワかき者にてあるまゝ、宵の間色々の事を語り各ワめかせ夜中過まて高声にて語り候うちに寒く候物を着セて給はれとて上はをりして語り候内にそろ〳〵縄をくつろけて置、暁皆〳〵宵の長物語にて寝入たる時そのまゝ縄をとき逃申候、年寄候人居れかたられましきに、ワかき内にも切者あらは用心セんほとになるましきと語り申しき

一

四郎兵、次郎右衛門語被申候、ある人廿ハかり迄よき事も悪き事もなく候時、各物語にあの人は臆病さらにハなけれ共はやしとき（早しどき）過たり、もはや手柄はなるましきと被申候つる、案のことく一代見合て過たり、とかく十五、六にて致し候はねは名はとられぬもの也、唯今なとはいかに思ふても浮

世静にてハ成す候、年いくつなり共十五、六の時分と心得て無理なる事をせよと被申候時、ワかき衆十五、六と心得申へき事いかゝ心持候ハんと申候へは別の事なし、何時にても見合なしに人のならぬ事ならハせんとおもひ人のいかぬ所ならはいかむとおもひ、タヾひと筋に見合なしにあふなくおもはてかゝりていきたらハ、手柄死たらはしそこなひても手柄になる、我いきてしそこなひを人そしるを聞す、名を残すとおもへは心やすくしよき也、惣大将にあらすして御方の負を思ふは皆見合から出来る分別也、しすませハ善、仕損へハ其分と思ふ心にて唯一筋にセよ、しそこないて死ぬ事人かまねならぬ故にそしる人は無物也と教候ひき

一　刀は中と(砥)にしたるか能キと権現様被仰候由也、まつ能きるゝもの也、又夜なとひからで(ずカ)よき由各被申候

一　しのひの時は高き所へあがらぬもの也、夜もくろく能見ゆる也、窪所よく候由

一　かまりきゝかまりの時猶以高所あしく候、道か窪キ所に居候へはよく聞ゆるもの也、窪所を物馴れぬ者ハいやかりて高き所へあかりたかるもの也

一　信長・城介殿御父子一所に御座候故一度に御滅候惣別城も程近く一所には取ぬもの也、親子城とて嫌ふ由山本勘介申候由

一　江戸にて西丸ニ権現様御座候所、台徳院様御見廻に御座被成候、折節地震いたし候、佐渡守・相模守御前にて

御父子かやうの時一所に無御座候ものゝ由頻に申候、台徳院様還御なし申候

一 権現様御代の御合戦之覚

大高兵粮入　御年十七　石ケ瀬　御先　酒井将監
かりや十八町縄手　梅ケ壺　将監
うきかい　酒井将監　ころもの　廣瀬　三度将監
一ノ宮後詰　御先　石川伯耆　一揆　御年廿
吉良　両度御先　石川日向　吉田　伯耆三度　下地御油
おかの城攻　かけ川　日向
下地の御油　姉川　酒井左衛門尉　御旗　筧勘右衛門
ほり川　みかた原　御先御旗　勘右衛門
野田福嶋　并有岡　并志賀　森山なし合戦

かねヶ崎　いぬい　七郎右衛門

長者の城攻　御年廿四　かうミやう　御先　大須賀五郎右衛門

すハの原　小山のき口　御旗　大久保次右衛御甲　内藤四郎左衛門

いぬい奥山　七郎右衛門　とうめ退口

新府　左衛門尉七郎右衛門　高天神　御先二度　大須賀五郎右衛門

長くて　御先　榊原式部　御旗　筧勘右衛門　かにえ

関ヶ原　本多中書井伊兵部　御旗　酒井作佐村越与惣左　大坂　井伊掃部藤堂和泉　御旗　保坂金右庄田三左

右三十二度、御年十七より七十四迄の内也

此外、小田原　御先　榊原式部　御旗　村越与惣左渡部半十　御鑓　長嶋新介永井善左衛門

奥州九戸

一　小山まきほくして（巻＝包圍）御のき候時、敵に向ひいらふへかゝり（井籠崎）御のき被成候、それ迄は三郎様御先へ御のき候、田中より敵をあとに

して御のき候時、三郎様御馬をひかへ権現様御先へ御のき候へと御父子良く御したい候て御のき不被成候、各は敵ハ間近し早く退たく思へ共御退不被成候、終に親殿様御先へ御のき被成候、しつはらひを三郎様被成候、御年十七の御とし也、各感し申候

一 台徳院様、嶋田弾正町奉行の時御教被成候、云事に負極りてきり候ハて不叶ものも、しはらく待て助てよき程を分別してきれと被仰候由

一 中村式部少輔居申候後、駿河の御城に堀向に桜の並木候つるを権現様御覧候て、式部少輔物馴候ハす候、堀向駒寄にてもあれは敵仕よりの便になるもの也、竹たて（盾）なとつけよきものなり、まして並木は敵のミ（身）かくし竹たはの

便になる由被仰候つる也

一

大坂御定番に阿部備中・高木主水・稲垣摂津守被仰付候時、台徳院様御意に火手(大)の御門は阿部備中、京橋口ハ主水、玉造は摂津守可相守候、惣して権現様被仰置候城代なとは心得可有之事也、古今城は乗取に少の城も力責無理にはとられぬもの也、殊に大坂なとは丈夫に御普請被仰付候、右の三口さへよく固め候て大橋の御門に鉄砲百、二百置候は中々攻取事あるましく候、御本丸は西裏二口なれは両番頭、御番衆五十人つゝ、其外内の者共可有之候得は、たとひ外曲輪破れ候ても御本丸はかりにても百日も二百日もふせくへし、惣別初心なるもの共、矢狭間を一人あて二人あてと人賦(夫)不足なる

なと申候、結句城には大勢籠候へは誰人疑出来てあしきもの也、御門さへよくかため候ハヽ乗取事ならぬ也、一大事は籠城に三ツあり、ちゃうりやく（調略カ）とないかん（内患カ）と付入なりまつちやうりやくは城中の者に縁者・親類又は近付につきて、金銀をつかひ褒美を何ほと遣ハし候半、手引せよなといひて引入候事、又ないかんといふは城中の者とも誰彼は中よく中あしきなといひて、うちはにていひさまたけ、互に心置して下々気遣して破ゝ候事あり、又付入は敵なにかたはかり（たばかり）城中を引出したかりてよわ〳〵とあひしらひ計略をなすを、打取候はんとて一人出候へは我おとらし（劣らじ）と出候故、はや其人数引とりかね、付入に城へ入もの也、此三ツを能々可心

得候由常々権現様御意にて候まゝ、各よく〳〵心得先城主ハ城を取られぬ様大手柄出てのはたらきは一向誉ぬ事也と被仰候、此上は各覚悟次第よく〳〵可相守之由上意也と物語也

一

其ついてに物語に、信玄駿河蒲原城の前、浜手を甲州衆の小荷駄通候を蒲原城より出追落し取候を、信玄重ねて土俵又は草なとを荷物のやうに拵(こしら)へ右の浜はたを通し城の前又は後の山にかくし勢を置て右の荷物通り候時、城中よりおの〳〵出追落し取らんとセしを、小荷駄に付候者共少々ふせきけれは猶城をあけ皆々出候時、前後より時声をあけ攻入候故、即時に城を取候由、米倉丹後物語也

一 権現様駿河もち舟の城被成御坐（攻カ）候時、先手松平周防守也、城主各セり合候をワさとよわ（弱）〳〵に引寄、人数一人も懸り候事無用と御下知候而そら負してある程ニ、城衆出ル時御返し則付入御取被成候由、新見彦左衛門物語也

一 籠城の時矢文入候へは城中我人疑ひ申誰か持口へ矢参候なといひて城内無心元（元気なき）ものに候間、計略にセめてよりは矢文なと射入候よしと物語也

一 城中雪隠作様の事、うつほつけても刀さしてもそのまゝ居候やうに、ひろく五尺計ツヽに作り候由也

一 同不浄流し候事、すてくる（捨曲）輪に堀ほり候、又は川なと丸の内江取こみ候て度々雪隠を捨候ハねは後は何共捨所なく迷惑の由被申候

一

小太刀半七とて兵法修行の者候つる、鉄の扇をさしそれにて仕合論兵法（兵法を論じ）数度手柄顕候、其弟子ニ台徳院様御尋被成候、何之別成義なく面白なくと存かゝり候てしあい仕候、極意也と申上候へは、殊のほか御感被成候、仕合ニも又物前ニてもおもしろなと心を取むけ候へは恐しき事なく謀も出来動転なしと古人申候、同意也と御意被成候、喧嘩少の俄事にも動転する故に手廻遅く手前ぬるきもの也と各申候由

一

総別心懸は何方にても所を見合、尤座敷にても何卒あらは、としてかくしてと不断心懸候へは、物はやきよし古き衆物語候

一

人間は死地に入る事第一也、総別生地死地とて二ツあり生地はいきんと思ふ、死地は死にきる事也、腹なと切者

又は大形の者最後なれハあしき事なく、是死地に入故なり、思ひ切故也、昔より十死一生の合戦は仕よく必勝もの也十死一生の合戦は人数立武略なければ必負る由なり窮鼠却而猫をかむといふに同し、名大将は我身計にあらす軍兵をすゝめいましめて死地に引入ル故に、最後の働き手柄をあらハす常にもある事也、ならぬ奉公をすゝめ見届させ候も同前也

一はからさるに城なと乗らんとおもひ又は俄に合戦を渡さんと思はゝ、敵の食する時分をかんがへ朝かけ夕かけ也、この方は能々したゝめして敵食セさる以前にかゝるへし、卯の上刻、申の上刻、夜は子と丑の時

一物前ニて鑓の持やう、竪にかつきてそのまゝ打入よき様に

持へき也、横たへて持候得は第一下知するもの馬にて乗こまれぬ也、又敵にあひてそのまゝ打かけ候へは先うハ鑓になる、惣して鑓は、たゝきあふ由被申候也

一 みかたか原ニて御負被成浜松の御城へ御入候時、佐久間右衛門尉申候は、ケ様の時は御持の城々へ早々御自筆にて無何事御城へ御入候由被仰遣可然之由達而被申候、則遠州三州の城々へ御状被遣候へは城持衆心安存近辺心替りの衆無之よし、おの〳〵物語也

一 用心は外へ顕るゝやうに致たるか能もの也、用心すると沙汰あれは忍の者卒爾ニ入らぬもの也、用心は外の聞へを本とすといふ也

一 右人の用心は人の心を知るを以て本とす、または人数の

集るへきを知るへし、何たる者も身を捨命を捨ハセぬもの也、うつてのくへき（討て退くべき）くらゐなけれは古今セぬ者也

一

伏見にて誰やらんはりふミ致申候を或人見出シ年寄衆へ申候、則被申上急度御穿鑿可申付由被申上候へは権現様御意には、ケ様のはりふミなと御改被成候ほと結句致すもの也、侍の心あるものはケ様の事はセぬものなり直にいひ直にはたす（果）事ならすして女なとのやうに影事又者はりふミいたすもの也、左様の事いたし候者は侍にては無之候、それを見出し候て誰彼に申候者又同意なり、そのまゝさき捨候はてそれを見聞候て申候者の結句しわさにて可有之由、御意被成候てよりその後無之候由

一　籠城のこしらへ、二重塀に中こミ小石ましりの土塀土台の下に穴をほり石の一人持ほとなるを身かくしとす、もし用の時は此の石打候ハんため也、穴の中ニて走廻るへし、塀より少のけて竹たはを横に厚く置て上を武者走にしてセめ候時それへよりて石にてもすな灰にてもまくへし、表塀破候ても内の竹たは塀にてかゝゆるやうにすへし

一　塀の上に幕を張り矢切とするもあり、此時は塀に床をかき其上を武者走とする也

一　去松明（サルタイマツ）の事、かねて堀底へ塀より縄を張りて置へし其縄に又別の縄に車もよく候、唯松明を結付てあけおろしをして夜の内にさい〳〵堀底を見る也

一　夜廻り聞かまりと同前の事

一　城攻候には夜々仕寄竹束を付よする也、仕寄穴をほりても行所に寄へし、穴堀様横矢なき様にほるへし

一　竹束付候事杭をふりそれにもたセかけ入違ひをして人数出入する様に口をする也、竹束女鳥羽（めとりば）に二重程立かけて矢狭間きるへし

一　竹束初と又後仕出候竹束之間、人数の多少によりて三間も十間にもする也

一　竹束のたはねかる〳〵と持候様ニ七所結申候、又五所も能候、常のたはほとにして軽々と持又材木にても仕寄候也

一　うそ鉄炮をかけ狭間一ツに何丁鉄砲の多少出張べし

塀の上同前上へ人あかる所うつため也

一堀のあり様横矢を本とする、見込なき様に虎口とるへし曲り多キを本とする、但し横矢左勝手は敵を後にする故に城中の射手後を無覚束おもひて存分にならぬものなり、右勝手の虎口なれは敵を前に見て打つ射つする故に心安くはたらくもの也

一くゝりの事、敵とたゝき合候取込時後ひろけれは城より出たる人無覚束、後をこはく思ひてはたらきにくき由、前のひろきやうにうしろに土居あてゝ取込やうにとるへし

一石弓の事、山城に用る也、土居の腹に大木を横たへてつり縄木の大小によりて三所も五所も塀の下へつりて

右の木の上によきころの石を多くのせ置て敵堀へ付て乗らんとする時鈎(釣)縄を一度に切落す、木と石を一度に落とす故に人多く死也

一人多焼殺す事、城攻て人数つかへ定らむと思ふ所にする事也、城中より程遠くすへし、三十間或廿間計にこしらへへく、まつ多集て先つかへ乗かねんと思ふ所に二所にも三所にも一・二間、深サ四尺ハかりに穴をほり鉄炮の薬多くいれ散らして上に小材木・竹なとにて簀の様にして其上に小石を置て土をかけて落し穴のやうにこしらへ其穴へ城中より竹を節をぬきて土の下一・二尺にふせて火縄に鉄砲の薬を塗て右の穴へ通候やうにこしらへて城中より火を付候得は

其火右の穴の薬にもへ付て焼上ケ土石飛也、人数たまりたる足の下より焼あくる故に多く死する也

一　城中の小屋柴屋とて塗屋にするもの也

一　塀の際竹束つけ、塀と竹束の間腰たけに堀をほり其内にゐて塀の土台の下をほりてそれより鉄砲うつもの也、ワさと狭間ふたをひらき外より狭間を開てむだ鉄炮打候様に致し候もの也、竹束の後に土俵をつきあけて武者走とする、塀を乗て息きれたる所を土俵の武者走へ上りうたむため也、此時石つふてよきなり

一　塀の上に幕を張り候、幕は矢・鉄炮通り不申候、其時は塀の内に土居又は土俵又は塀のひかへに床をかき武者走としてふセ候也、夜々忍のためにさる続松又は投続松肝要也

塀は一丈塀よき也、覆は巻おほひにする也

一 城攻の時も又軍かけ合の時もこれほとの事は誰もする事也と思ひて万事強過て名を取ぬ事多き也、けいはく（軽薄）なると思ふ事後に高名になるもの也、何時も内の者にも首数とらせ少ノ事もいひたつれは後に高名になるもの也城攻の時も昼夜心かけ一番に乗へしと思ふへし、何様成首を取れ候程とれは帳面（ちょうづら）もよく子孫の代にいん（威）げん（厳）になるもの也と語被申候

一 侍は常の心懸肝要にて用心すれは物に動転セす、うかとすれは地震雷にも動転するもの也、これを以て知れ常に心かけ候へは必すおあふ事多きなり

一 具足早く着る様、小手をは着候様に筒のこはゼ（鞐）に懸

候て其まゝ具足着て小手さして片手にてさしかた〳〵の小手頭の上へあげて手をさし入候也、上帯して刀指其後小手はめたるもよき也

一みかた打なき様の事、刀の鞘に紙を広サ二寸か三寸に切て二ツ巻になり共三ツ巻になり共巻くへし、またしてを両方の肩ワたかミに付るもよき也、一あひ言葉一鑓しるし、何ニても目立候様に、一差物、一甲前立物、一鉄炮、弓も二ツ巻か三ツ巻、鑓同前、第一跡より鉄炮打事禁すへし、みかた打ハおくれはセの者のする業也

一備をかたむるといふ事、一手〳〵丸々も備へまはらになきやうにそれ〳〵の道具〳〵一所に居て物し、馬より下りて□(の)ほりの際に居て馬をは遠ワきへ且又一所におきて

まはらかけのなきやうを能き備といふと被申候也

一

太閤の奉行衆と権現様と伏見において色々出入ノ時奉行方大勢衆おの〳〵権現様御屋敷へ群集して此屋敷所もあしく殊に無勢也とて、六条の一向門跡御頼ミ六条へ御ひらき候歟、さなくは大津の宰相殿御ミかた（味方）也、大津の城へ御坐被成可然之由被申候へは、まつ一向門跡は長袖也、それをたのミ勝て嬉しくなし、負て末代の弓箭の名折也、覚悟に及はす、又大津の城へ入候て、ケ様の時其所を去（い）のき候得は、はや落人と成物也、両様に御合点、かやうの事はおの〳〵は知るましきそとて、御動転なく御座候へは、奉行方も御威勢を見て手出し致さす候と被申候也

一

ある時権現様疋田豊後と申候天下一の兵法人を召て兵法御尋被成候、豊後随分御指南申上候へは、名人には候へとも兵法の人々によりて入所と入ぬ所とを知らぬと御諚被成候其謂は我ほとの者は人きる様を色々申上候、天下持又は大名なとは相手かけて人きる(切)事はなきもの也、人にねらはれ又はきらるゝ時、其場をはつセは供の大勢寄合そのものきる故に大人の兵法は相手かけの事ハいらす候と大つもりを以て兵法とすると御意之由、語被申候也

一

台徳院様常の御形議(儀)結構に天性倹約を専と御意被成候、御若年より少も無作法不形儀なる事を御嫌、御行跡下々迄恥申候、或時御煩の内も御行儀如常御坐候故、家老衆・医師衆・御咄之衆何卒少御気色をくつろけ御

養生の為とおの〳〵さゝやき候へとも、申上候人無之候、御煩大事に被為成候時御咄之衆何となく申上候へ□(は)由おの〳〵相談して山口修理・安栖其外誰彼ついてよき御物語に被申候様ハ、古名将賢主も内外あり、殊に御煩の時は万事の御政を止たる、奥にて御心安く御養生被成候様ニと各存候段申上候得は、少も人数持候者は其仕置をつかへさセ人の煩ひを知すして遊興にかゝりて己を忘れ候事さへ無勿体候、まして一国共治候者身をたのしミ候ては何として人間たるへきや、まして天下を知るもの長生をこのめはとて天下をくるしめ其役をかきて身を楽にせん大名は犬畜生にハ劣たり□(と)御意なされ候故、後おの〳〵感涙を流し申候つると

語被申候

一

或時御用人共御撰の時、台徳院様御意には御目近キ者共御役被仰付候に其もの悪きは御目の違也、遠くに御奉公の外様の者御役被仰付候に、其身のあしきハ頭(かしら)年寄共の越度也、是も当代は其旨人存すれ、末代には御身の御難ニ成候間、専に人を見知るへき由常々上意也、乍去(さりながら)諸之あしきとて其者捨へからす、去年悪事候て当年能事候は、あとの悪事をすて能者の方へ入へし、人間の分別は能なり悪しくなるうちに先非を改めへからす候、当是を専らにセよと被仰候て昨日迄あしき事思召すも今日善を行へハ御褒美□(の)御ことは被成候つる也と語被申候也

一　西国の衆御前相済被召出候て、其蓄御切米ニても可被下候哉と被申候へは、切米に及す知行前々の如くとらセへし召籠られ候にて科の分は消候、被召出候上何とて前の知行おさへ候ハんやと上意ニて何(いずれ)も拝領仕候由被語候き

一　嶋原一揆蜂起して色々取沙汰候砌、彦左衛門被申候は兼て申如く三千の敵はたとひ何者ニても卒爾には討果かたきもの也、かけ合の合戦にさへかくのことし、まして籠城の大勢たやすく討果し候事大事也、切者のものハ城の様体巡見して責易きをはセめ力責になりかたきをは、付城又は柵をふり取出をして丈夫に構置候へは、城中よわりはて手間とらすにセめ、人数損し候ハて落城する也大将御いそき候て段々に軍使を被遣候得は、必す先の

ものは討死仕候ハてかなはす候由、被申候つる、果て板倉内膳討死致され候き

一 其砌同人物語のついてに、或人今度嶋原ニて寄衆油断故城中より忍出て竹束柵木なととられ候由被申候へは昔僉議（せんぎ）には寄衆竹束柵木なととられ候へは一段手柄の様に申候つる、其謂は城中より出候に城際近キ所の竹束ならてはとらぬもの也、近きを乗こし跡なるはとらぬものなり、仕寄近きゆへにとられ候とて一段誉候よし申候へは、満坐尤の由申候つる也

一 同時城中より夜討出て黒田右衛門佐先手の者多く討れ其上柵の木二重まて破り強く働き候、右衛門佐先手の者共取合はたらき敵多く討候由或人語候へは、また

或人被申候は、城責仕寄の衆城中より夜討に出候へと願は少此道心得たるものは誰も知る事也、それに先手の者共油断してミかた大勢うたセ柵二重破られ、先勢敗軍して一手二手破られて其後敵を討取たりとも何の手柄か有むと被申候へは、掃部殿それよりも不審は夜討の人数時刻あしく寅ノ刻に夜討に出て夜明方に城中へ引取候につけ入にセぬ事はよきものなきと思ふとのたもふ、おの〳〵尤と被申候つる也

一同時に夜討の者共引取際に鍋嶋手へかゝり夜討帰さまに働き、仕寄の井楼矢倉に火を懸て城中へ引取候と申候へは、切者敵も殊外不鍛錬也、御方同事也、まつ夜討は暗を本とする事、敵に多

少を見セぬ様に大勢のやうにはからむためなり、または付入に城を乗られぬ為なるに、読す書すノ寄合也、御方も敵に井楼焼れ油断のミならすあかりを力に付入にせぬ事武道知らぬ故とおの〳〵わらひ候き

一

同時夜討の者共の語候とて、立花・細川手前へ夜討うち候ハんか相手かましきとて不討と語き、其時右両人の贔負と見へて或人立花・細川殿より被申越候夜討出□□□□□鉄炮をかけ毎夜用心致候故に夜討出候（本ノマ）、はぬと物語候へは、井伊掃部殿それは武道の心懸違ふやうに覚へ候、古今城責致者何とそ（何卒）して城中の者をおひき出すやうに内用心を致し、しつまりかへりて夜討出てはこのむ所と付入に致さんために心かけ、何とそ夜うち

にも昼打にも出候様に致すこそ本意なるに、夜討うたれぬ様にするは手前ハかりの用心歟と被申候得ハなか〳〵尤と被申候つる

一 同時、夜討死人腹をわけて食事を致し候やと穿鑿（せんさく）候へは胡麻・大角豆なとくらひ候と見へて飯は喰候体無之候、定て城中兵粮つまりと見へ候となか〳〵被申越候へは、武道不僉議用るましきとておの〳〵笑也

一 上使衆大多有程一所に集り先を見つくろひ候はて跡にて下知致され候事天下の取沙汰也、上意御諚はたとひ打死と思召候ても必々聊爾（りょうじ）無用と先懸無用と御おさへ有事也、此道は君命をうけす父子之礼を忘れ親しきをたしぬきたる道なるに、常の上意と心得

られ候やと人々とり沙汰申候、諸侍日比（ひごろ）律儀に首尾相応言葉の末もいつはりなきやうにたしなみ候は、此武道の時ぬけかけセんため也、武略といふは是也、謀計共いふ也君命をうけすといふは聊爾のならぬ大事の道なれは必君命をうけたがりてひかへたがるによりて古今いましめおく也、卒忽聊爾にしてしすませは手柄しそこなへは死候故に謗（そしり）を聞かす候也、宣命を給わる日三ツの心得大将にあるといふは、宣命を給る日身をわすれ家を出て妻子をワすれ戦に向ひて命を忘るといふ事定りたる法也、今度の大将衆出来大名故其道しらさるよし批判事外也

一

嶋田弾正町奉行の時公事（くじ）さはきのために公事の品々

の訴を集め書置きさはきの通書付候、おの〳〵末代迄調宝ニ候、これにて御さはき候てはかも参るへく候と申候台徳院様御咄に被申上候へは、則御意に其書物を以て公事さハき候ハヽ書物に合せたかり候て聞ところの公事ワきへなりて肝要の聞落し有へく候、公事のさはきはかねて思案に及す候、理非は自然に公事にあらはるゝもの也と上意也、各得心に及ふ也

一

大坂御陣の時先手へ御使番衆被遣候時、権現様被仰付候やうには、先手へ参候て三ツの見損候間よく〳〵心付候て見申すへく候、一先手いさミ申候か、二御扶持方つき申候か、三城中と心あはセ申候者あるか、此三ツ能心得候て可申上候由

御先祖御三代目信光様之御代ニ御奉公当御代

家光様迄九代也

八郎右衛門　信光様江御奉公

次郎右衛門　此時長親様之御代紀伊国ヨリ武者修行ニ甲(申カ)大久保ト申ス者罷下候長親様名字御所望ニテ七郎右衛門ニ名乗可申由御意ニテ為大久保也

七郎右衛門　法名浄源　若名新八

五郎右衛門　若名甚四郎

五郎右衛門　五郎兵衛　甚三郎

五郎右衛門　新八郎　新八郎

平右衛門　左エ門四郎

七郎右衛門　次右衛門　権右衛門　甚右衛門

相模守　玄番　半右衛門

昌隣(申)

加賀守　加賀守

安部四郎五相流

彦左衛門

平助　彦左エ門トナル

甚七

新蔵

大八郎　大河内ノ家ヲ継　善兵衛ニナル

石川主殿　同弾正

大久保右京　同宗三郎

大久保主膳　同宗四郎

大久保主計

大久保清左衛門　早世

堀尾帯刀

吉晴立身次第

天正五年　秀吉播磨国御拝領霜月廿八日

一　近江国長浜ニテ　三百石

一　播磨姫路　御入国　千五百石

一　丹波黒江　三千五百石

一　若狭高浜　一万七千石

天正十二年打入

一　若州坂本　二万石

一　近江佐和山　四万石　入出六年

天正十九年打入

一　遠江浜松　拾二万石　入十二年

一　越前府中　五万石　家康公ヨリ被下

慶長五年打入　忠氏ヘ渡ル子息出雲守殿也

一　出雲国隠岐国両国　家康公ヨリ拝領ス